梅若会定式能　令和４年２月 11 日（祝日・金曜日）13 時開演

能『西行櫻（さいぎょうざくら）』

―西行法師の和歌をテーマに春の花を称えた草木精霊物―

能「西行櫻」	シテ	（櫻ノ精）	松山　隆雄
	ワキ	（西行上人）	殿田　謙吉
	間狂言	（西行庵ノ能力）	金田　弘明
	地頭		梅若　実

花の名所を尋ね廻る人々が昨日は東山地主の櫻を眺め、今日は西山の西行の庵室にある櫻を見物に訪れる。
西行は庵室の前にある老木の櫻を愛して、花も一木、我も一人と、静かに眺め暮らそうと思っている所に花見の人々が多く集まってくるのは心外だ。が、情けなくするのもどうかと思い柴垣の戸を開かせて中に入れた。とは言うものの浮世を厭う山住の身を乱される事の煩わしさに「花見んと群れつつ人の来るのみぞあたら櫻の科（とが）にはありける」とつぶやきながら、都の人々と共に櫻の木陰にいた。
その夜も更けた頃、老木の櫻ノ精が白髪の老人となって現れ、「上人は『群れつつ人の来るのみぞ、あたら櫻の科』と言うけれど私は老木の櫻で花も少なく枝も朽ちて、人を招こうとは思っていない」と言開き「私に取ってはただ上人との出会いこそが嬉しいのです」と言う。そして花の都・名所の数々を称えて謡い、老足で序ノ舞を舞っていた。が後夜の鐘の音とともに夜もほのぼのと白んでくると、西行の夢は覚めた。辺りは花だけが敷き詰められ、老人の姿は消えていた。

□京の櫻の名所を美しく心地良いリズムで謡い奏でる地謡。
また『春宵一刻値千金』と謡い、少年の心を抱く老櫻ノ精が、太鼓の加わった流麗な序の舞で華麗さと重厚さを醸し出します。
お楽しみください。

他に	舞囃子	「弓八幡」	土田 英貴
	連吟	「胡蝶」	山村 庸子、三吉 徹子
	仕舞	「知章」	小田切 康陽
		「二人静」	角当 直隆、山中 迓晶
		「碇潜」	梅若 紀彰
	狂言	「昆布売」	三宅 右矩